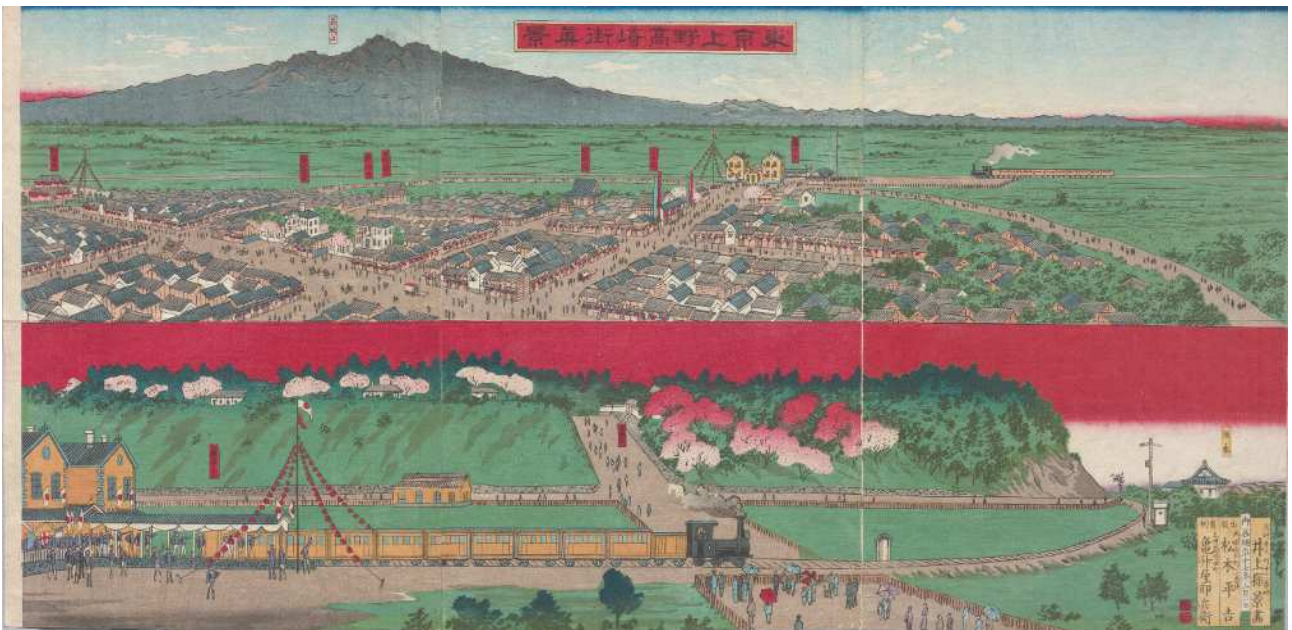


市史のひろば

第2号
(令和4年6月)



東京上野高崎街真景（高崎市立中央図書館蔵）

〔画像は群馬県立図書館デジタルライブラリーより〕

《 目 次 》

社寺の近代（丑木幸男）	… 2
史料紹介 川野辺寛「高崎志」（江原幸太郎）	… 3
「高崎」の由来は中国にあり？（富樫昌明）	… 5
執筆者紹介・表紙写真解説・奥付	… 6

丑木先生は、群馬県史の編纂に携われ、その後国文学研究資料館でアーカイブズ学の研究を進められました。また一方で『上野国郡村誌』、『群馬県寺院明細帳』、『群馬県神社明細帳』、『上野国郷帳集成』など群馬県の歴史を知るための基礎史料の刊行に力を尽くされてきました。高崎市立中央図書館では、平成30年度から古文書講座の講師としてご協力いただいています。

今回は、先生も分担執筆された『群馬県近世社寺総合調査報告書』での調査成果の一部を活かし、高崎市域での近代における神社・寺院の動向についてご執筆いただきました。古くから変わらずあるかのように思える神社や寺院ですが、明治時代に大きな変化を迎えたようです。

社 寺 の 近 代

丑木 幸男

はじめに 高崎市には榛名神社、八幡八幡宮、山名八幡宮、坂東三十三観音霊場札所白岩観音長谷寺、長野氏の菩提寺の長年寺など、名だたる古社名刹が数多く所在している。

いっぽうで、住宅街のかたわらに三夜堂や弁財天がたたずみ、車の行き交う道路脇に双体道祖神や馬頭観音が立ち並び、信号機のすぐ下に八丁締めが挿してあるのをみると、昔どおりの信仰が守られているように感じる。

しかし、近代になって大きく社寺は変化した。信仰心の変化だけではなく政治の影響を大きく受けたのである。

社寺数の変化と社名の変更 明治12年(1879)に社寺を登録して、すべての社寺を調査した記録があるが(丑木幸男編『群馬県寺院明細帳』全8巻、同『群馬県神社明細帳』全25巻、群馬県文化事業振興会発行)、それと現在の社寺数を比較すると(表1)、寺院は304か寺から189か寺と62.2%、神社は418社から189社と43.8%に減少した。その前に廃仏毀釈によって多く寺院が廃寺になったので、江戸時代と比べると少なくなった。神社は明治末年の神社合併により、半分以下になった。

もっとも激しく減少した吉井町をみると(表2)、明治40年から大正8年(1919)の間に92社が18社に合併した。吉井町域には江戸時代にできた近世村が28あった。一町村に3.4社があったことになる。そのうち村社が27社あり、ほぼ一近世村に一社の村社を認定した。明治

表1 高崎市の社寺数の変化(旧市町村別)

	1879年		2022年		減少率(%)	
	寺院	神社	寺院	神社	寺院	神社
	A	B	C	D	C/A	D/B
高崎市	164	193	111	89	67.7	46.1
群馬町	27	30	15	23	55.6	76.7
榛名町	29	38	15	17	51.7	44.7
箕郷町	24	41	17	24	70.8	58.5
倉渕村	7	14	4	8	57.1	57.1
吉井町	48	92	22	18	45.8	19.6
新町	5	10	5	4	100.0	40.0
合計	304	418	189	183	62.2	43.8

出典 A:『群馬県寺院明細帳』2,3,4,
B:『群馬県神社明細帳』5,6,7,8,9
C:群馬県の市町村別寺院一覧表
D:群馬県神社庁のホームページ

表2 吉井町神社数の変化

	1879年				1919年				減少率(%)
	町村数	神社数	村社	無格社	神社数	郷社	村社	無格社	
吉井町	10	28	9	19	8	0	5	3	28.6
多胡村	6	13	5	8	2	1	1	0	15.4
入野村	9	30	9	21	6	0	4	2	20.0
岩平村	3	21	4	17	2	0	2	0	9.5
計	28	92	27	65	18	1	12	5	19.6

出典:『群馬県神社明細帳』8,9

22年に多胡郡吉井町、多胡村、入野村と、甘楽郡岩平村の4町村が成立し、その後の神社合併により神社は18社に減少したが、町村によって減少率が異なり、特に岩平村は21社のうち19社が廃止され、残ったのは2社だけであった。首長の意向により合併の温度差があったようだ。町村合併で誕生した新町村の精神的紐帯となることを神社に期待し、一町村に一村社が政府の方針であった。神社としての尊厳を維持するために乏しい予算から財政的補助を与えるには、社数は少ない方が都合がよかった。しかし、由緒があり地域住民の信仰を集めていた古社を廃止することに抵抗が多く、一村一村社が実現したのは多胡村だけで(もっとも辛科神社が郷社に昇格)、それ以外の町村では2~5の村社が存続した。

岩平村上奥平では村社神明宮に大山祇神社(2社)、諏訪神社、熊野神社(2社)、菅原神社、巖島神社、飯玉神社、多賀神社、神明宮の10社を合併し、奥平神社と改称した。後にさらに岩平村坂口の熊野神社、造化神社を合併した。同様に社名を改称したのは長根神社、穂積神社、大武神社、多比良神社、岩崎神社があり、存続神社のうち三分の一が社名を変更したのである。

高崎市域でも高崎神社、大住神社(大類村)、彦島神社(京ヶ島村)、倉賀野神社、井野神社(中川村)、本郷神社(久留馬村)など合併時に社名を変更した事例が多い。

近代の変容 社寺は古くからの信仰を維持しているようにみえるが、近代では廃仏毀釈、神社合併という政府の政策の大波に翻弄され、大きく変容したのである。岩平村のように19社を廃止して2社だけ存続させたことは、氏子の信仰を大きく変えた。由緒や形態・日時が異なる祭典も合併してしまう、奉納するお神楽や獅子舞も一緒になってしまう、合祀した多くの祭神にお詣りしてもそのご利益は変わってしまわないのか、地域住民にとっては深刻な問題であった。しかし、政治の論理によって神社合併策を強行したのである。

市史の課題 『新編高崎市史』が刊行されて四半世紀、その間に平成の町村合併があった。合併した七市町村を含む新高崎市の枠組みのなかで、歴史を紡ぐことが課題となる。その試みとして社寺の近代を取り上げたが、詳細には戸長役場文書、町村役場文書などの精査が欠かせない。

江原さんは群馬県立歴史博物館の学芸係として、春の特別展「高崎藩のお殿様―大河内松平家の至宝―」を担当されており、今回ご寄稿をお願いいたしました。

今回の原稿では、特別展の成果の一部も活かして「高崎志」の史料紹介をしていただきました。「高崎志」は文中にもある通り、「近世高崎の歴史を語る上で欠かすことのできない史料」です。「高崎寿奈子」「更正高崎旧事記」(『高崎市史』第3巻)や「高崎古代并諸雑記」(『新編高崎市史』資料編7)と共に、江戸時代の高崎城下の様子を詳しく知ることができます。

史料紹介 川野辺寛「高崎志」

江原 幸太郎

群馬県立歴史博物館において、今年度、春の特別展「高崎藩のお殿様―大河内松平家の至宝―」を4月16日(土)より6月5日(日)まで開催した。その中で高崎の文化的側面を紹介する章を設けたが、そこにおいて当館蔵「高崎志」(写本)を展示し、今回その概要を紹介する機会を頂いたので記したい。

「高崎志」は川野辺寛^{かわのべかん}（1746～1793）によって編纂された、江戸時代の高崎に関する地誌書である。高崎の風土記ともいわれ、その内容は高崎の地名の由来やそれぞれの町、寺社に関するものである。寛は延享3年（1746）に生まれ、高崎藩の儒学者として名が知られているが、生涯にまつわる詳細は明らかではない。墓は東京小石川の是照院にある。寛の著作としては、天明の浅間焼けについて利根川沿岸の災害を彩色ある絵図として記録した「癸卯災異記^{きぼうさいいき}」や、高崎城下における民俗行事をまとめた安永9年（1780）の「閩里歳時記^{りよりさいじき}」がある。

「高崎志」編纂の契機は家臣の宮部義旭^{よしあきら}が4代藩主輝和^{てるやす}に進言し、天明8年（1788）に輝和が命を出したことによる。この頃前橋には「前橋風土記」があり、それに対する存在として編纂されたとされる。それ以前は宝暦5年（1755）に西田美英^{よしひで}が著した「高崎寿奈子^{すなご}」があったが、やはり公撰の事業として残したかったのであろう。全文の翻刻は『高崎市史』第3巻（昭和43年発行）に詳しいため、ここでは総目録を表にまとめた。

表 「高崎志」総目録（『高崎市史』第3巻より作成）

巻上	高崎大意 高崎城 赤坂社 二宮社 浅間山 興禅寺 威徳寺 石上寺 大染寺 光明寺 竜広寺
巻中	連雀町（附神明宮） 田町（市神宮、慈上寺、木町、古着町、八軒町、柳町） 真応寺 九蔵町（附一里塚三十三間長屋） 正法寺 大雲寺 本町（附市神宮、佐渡御金蔵、湯屋横町、椿町） 普門寺 法華寺 弁天堂（附念仏堂） 若宮 八幡森 柿樹薬師 四屋町 赤坂町 諏訪社 熊野宮 慧徳寺 長松寺 観音堂（附大師石念仏堂） 薬師 相生町 常盤町 筏場 四阿宮 稻荷山 観音
巻下	新町（附諏訪社、清海寺） 真福寺 延養寺 新田町 南町 愛宕山（附竜宝寺弁天） 新喜町 鞆町（附時鐘、研町） 中紺屋町 玉田寺 寄合町（附烟草横町） 新紺屋町 諏訪社（附金剛寺） 嘉多町 覚法寺 檜物町 鍛冶町 前裁町（附下横町） 牢 向雲町 地蔵堂（和田七騎ノ卵塔） 植竹 職人町（大工町） 砂賀町 通町 庚申堂（附庚申寺） 安国寺 大信寺 念仏堂 白銀町 本紺屋町 善念寺 稻荷社 羅漢町 道祖神宮 法輪寺 新町 弓町 磬撃町（附十王堂） 江木新田 諏訪社 無縁堂 和田三石（附録）

（ ）は筆者による

さて、「高崎志」には高崎の地名の由来となる記述がある。

それによると、初代藩主である井伊直政は和田の地に新たな城を築く際、地名を「松カ崎」に命名しようとしたとあるが、竜広寺の僧である白菴に諮問したところ、成功高大の意から取り「高崎」にすべきという進言があり、直政は大いに喜んでこの地を高崎と命名したという。

史料「高崎志」より高崎大意の項（『高崎市史』第3巻より引用）

…和田ノ地モ箕輪に属ス、慶長三年戊戌中山道ヲ開カレシニ及テ、和田ハ緊要ノ地ナレバトテ、直政ニ仰セ城ヲ築シメテコレヲ賜フ、此時直政地名ヲ更テ松カ崎ト云ント竜広寺ノ住持白菴ニ語ラレシニ、白菴曰尤然ルヘク候、去ナガラ諸木ニ榮枯ノ時アリ、物ニ疆ノアルコトハメヅラシカラズ候、公既ニ命ヲ奉テ此城ヲ築キ玉ヘルハ、所謂盛事大名也、サレバ成功高大ノ義ニ取テ高崎トシ玉ハンハイカバト云ケレバ、直政大ニ悦テ高崎ト名ツケラレ、且高崎ノ二字ヲ以竜広寺ノ山号トナスベキヨシヲ命ゼラル…

高崎城は旧和田城を取り込むように築城された。交通の要衝として江戸に近く、信越地方への便も良かった。もちろん、城の後方を流れる烏川の水運も、高崎や倉賀野が栄える大きな要因として挙げられるだろう。

「高崎志」には城下町についての記載が多く確認できる。一例として、鍛冶町の記載を

挙げる。鍛冶町は、その名の通り「鍛冶多キガ故ニ名ヅク」町である。高崎城東門の南に置かれ、直政によって箕輪から高崎城下に移された。直政によって多くの刀工が呼び集められ、守重・守次・守行などを輩出する。刀工の名を連ねながら町の特徴を記載する方法は興味深い。

なお、城下町の形成は城や武家屋敷を優先し、次に城下の町割が行われる。城の正面（大手門の前）を連雀町とし、鍛冶町はその南西に置かれた。また、該当箇所は当館第106回企画展「戦国上州の刀剣と甲冑」（令和4年7月9日～8月28日）において展示予定である。

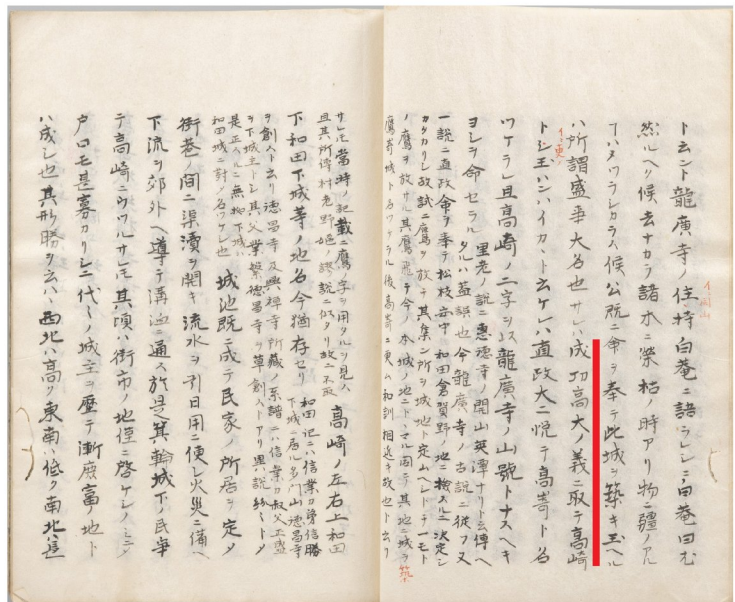
このように、「高崎志」は近世高崎の歴史を語る上で欠かすことのできない史料である。写本は当館の他、高崎市、群馬県立図書館、群馬県立文書館などに複数伝わっており、今後より一層の活用が期待される。

参考・引用文献

『高崎市史』第3巻（高崎市、1968年）

『新編高崎市史』通史編3 近世（高崎市、2004年）

『三百藩家臣人名事典』第2巻（新人物往来社、1988年）



「高崎志」（写本）群馬県立歴史博物館所蔵
傍線部は筆者による

「高崎」の由来は中国にあり？

富樫 昌明

この場では、中央図書館所蔵の古文書や、古文書を撮影した写真などの中から史料を紹介させていただきます。今回は「高崎」という地名の由来に関する史料を取り上げます。

さて、高崎という地名の由来については「高崎志」に記されたものが一番広く知られています。これについては、3頁からの『史料紹介 川野辺寛「高崎志」』で紹介されていますので、ここではあまり知られてこなかった異説の一つを史料と共にご紹介いたします。

今回紹介する史料は、天明期（1781～1789）ごろに記されたと推定されるものですが、この史料の冒頭にある「高崎」命名の経緯が記された部分を引用してみましよう。

如何ニ候哉御評儀有テ、箕輪城ヲ天正十八年庚寅年赤坂庄中和（田、脱カ）エ引、天正十七年己丑ノ二月（より）方築始メ、翌寅ノ十一月成就して十二月御移徙有、大唐国高崎ト云ル處有、此所繁昌地成故ニ高崎とがウズ（梅山大作家文書・No.□-99）

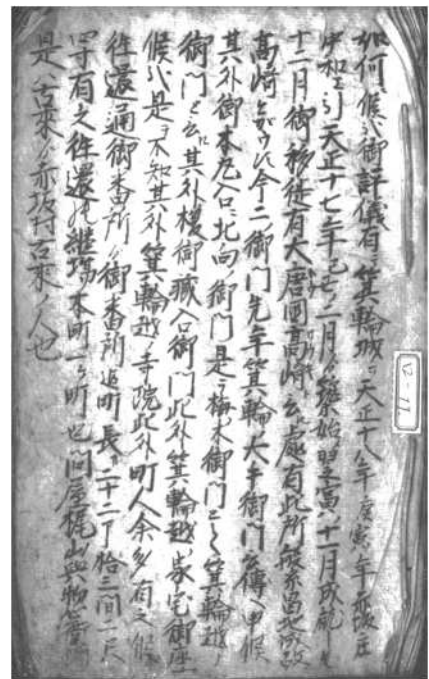
高崎という地名の由来に関して、「大唐国（中国）に高崎という場所があり、その地が繁昌した土地であることにちなみ高崎と号した」と記されています。では、実際に中国大陸

に「高崎」という場所は存在するのでしょうか。そこで、中国の地図で「高崎」という地名を探してみると、福建省厦门市に「高崎国際空港」という名を見つけられました。断定はできませんが、ここが史料に登場する大唐国の「高崎」なのかもしれません。

なお、井伊直政が箕輪城から高崎城へ移ったのは慶長3年（1598）のことですが、この史料では天正18年12月に高崎城へ移徙（わたまし、引越のこと）したとされています。天正18年は井伊直政が箕輪へ封ぜられた年ですが、これと混同したのでしょうか。

「高崎」の由来については、この他にも諸説ありますので、機会があればこの場で紹介させていただきます。

今回紹介した史料は、新編高崎市史編さんに際して近世部会がマイクロフィルムで撮影したものです。現在ではそのフィルムを中央図書館で保管しており、閲覧することができます。



（天明期力）〔高崎・小鳥村に関する故事書上〕

執筆者紹介

丑木 幸男 国文学研究資料館名誉教授

江原幸太郎 群馬県立歴史博物館

富樫 昌明 高崎市立中央図書館・元高崎市史編さん近世部会調査員

表紙写真解説 東京上野高崎街真景〔明治17年（1884）／36×75cm〕

東京上野を起点とする鉄道は、明治17年（1884）5月1日に高崎まで開通した。その当時の様子を伝える資料で、上下に分けて高崎駅、上野駅の情景が描かれる。

作者は井上探景（1864～1889）。初め月岡芳年、後に小林清親に入門し、明治13年（1880）より作画活動を始めたという（『浮世絵大事典』）。

本資料は「群馬県立図書館デジタルライブラリー」（https://www.library.pref.gunma.jp/?page_id=650）で公開されており、高精細な画像を閲覧することができる。

市史のひろば 第2号

発行日 令和4年（2022）6月10日

編集・発行 高崎市立中央図書館

〒370-0829 高崎市高松町5-28

TEL 027-322-7919／FAX 027-324-3423

E-mail toshokan@city.takasaki.gunma.jp

※「市史のひろば」は、高崎市立図書館公式ホームページに掲載されています（<https://lib.city.takasaki.gunma.jp/>）。